B 142　衣服の廃棄基準の因子分析的研究

武庫川女大家政　○藤原豪晴　中田千草

目的　過去の社会では、衣服の実用的機能が重視されていたが、今日の社会では、社会的、心理的、美的欲求に関する衣服の役割が重要性を増している。これに対応して衣服が廃棄されるときもこれまでとは異なった基準で廃棄されていることが期待される。ここでは、衣服の廃棄はどのような基準によって行われているか、その構造を解明し、これが女性の10代から50代にいたる年齢層によってどのように異なるかを検討した。

方法　女子大学，短期大学の被服科の学生およびその母親，女子大学被服学科の卒業生，合計489名を対象に調査した。衣服が廃棄（実際に廃棄される場合のほか、着用の意志のなくなったものも含む）されるときに関係していると考えられる基準、20項目についての調査結果を因子分析して3因子を抽出した。

結果　最大の寄与率を占める第1廃棄基準は、流行おくれ，着あきた，似合わなくなった，やぼったい，派手と感じるなどの項目からなっており、これを「嗜好的損傷因子」と命名した。第2廃棄基準は、型くずれ，テカり，色あせ，すり切れ，しみ，収縮などの項目からなっており、「物理的損傷因子」とした。第3廃棄基準は、手入れがめんどう，組合せが難しいという項目からなり、これを「着用気づかい因子」と命名した。次にこれら3因子の因子得点を年齢層別に分散分析したところ、いずれの因子についても1%の危険率で年齢層間に有意差が認められ、中高年層になるほどこれらの因子を重視して衣服を廃棄していることがわかった。なお、第1，2，3因子をそれぞれ構成する廃棄基準の評定平均値は、第2因子が最大であり、実際には、物理的に損傷した場合に多く廃棄されている。